【用語】上武両国―上野・武蔵国　信甲越―信濃・甲斐・越後国　御府内―江戸　硫黄稼株―硫黄稼ぎをする権利　相師―相仕とも書き、事を共にする仲間、共同経営者　出情―出精、よく働くこと　実正―真実で間違いないこと　叺―藁むしろの袋　異変―違変、契約に反すること

【解説】硫黄は火山・温泉の多い日本では多量に採取され、十二、三世紀頃から輸出品のなかでも重要な位置を占めてきた。江戸時代には火薬の原料として使用されたが、付け木（マッチ）・花火・薬種などの普及によって需用が増大すると、硫黄山は商品生産の場所として注目され、各地で開発が行われるようになった。

吾妻郡の白根山と万座山は古くから良質の鉱脈をもつ硫黄山として知られていたが、白根山では天明四年（一七八四）に江戸の小松屋と信濃国相之島村（長野県須坂市）の覚兵衛が硫黄採掘を許可された。その後、採掘権は寛政九年（一七九七）から地元有力者の手に移ったが、嘉永元年（一八四八）には干川小兵衛ほか四人による共同経営が行われた。この文書は、硫黄株を六口に定め、販売地域の分担について取り決めた議定書であり、白根山硫黄の販売圏は武蔵・信濃・甲斐・越後と江戸であったことがわかる。その後、硫黄の採掘は運上金の高騰や値下りなどによって次第に経営が悪化し低迷するが、安政六年（一八五九）横浜が開港されると、湯花とともに外貨獲得の一翼を担うことになり、再び活況を呈した。